

■(三宝院)満濟(推后) 僧, “黒衣の宰相”。將軍義満・義持・義教に尊崇され, 賢俊の活動を継承発展させ, 幕政に関与。

まんさい
室町御所・1378= 摂関九条家末流の今小路基冬の子に生まれる。
義満親政始・1379= 1歳:

義満全権掌握1382= 4歳: 実父基冬が死去。その兄権大納言今小路師冬の養子となる。養母は聖護院房官法印源意の女で, 足利義満室業子に祇候, 白川殿と号した。

・ ・ ・ ・ ・ 1385= 7歳: この頃, 足利義満の猶子となり, 醍醐寺三宝院に入室。

・ ・ ・ ・ ・ 1387= 9歳:

南北朝合一・1392=14歳:
隆源大僧正のもとで得度し,

義満出家・1395=17歳: 義満の意向で, 三宝院門跡となり, その同道を得て, 京都法身院に移住し, 醍醐寺第74代座主となる。
・ ・ ・ ・ ・ 1396=18歳: *大僧都。以降, 次々文書発給するとともに, 義満から厚い庇護も受け始める。延暦寺戒壇院で受戒。

倭寇禁圧公約1398=20歳: 義満より, 伊豆国密厳院別当職を安堵される。東寺との関係も始まり,
応永の乱・1399=21歳: 法印に叙され, 拝堂。
・ ・ ・ ・ ・ 1400=22歳: 西南院実濟より, 伝法灌頂をうける。

花伝書・1402=24歳: 宗像大宮司氏経に六条八幡宮領筑前国武恒・犬丸の代官職を宛らう。
・ ・ ・ ・ ・ 1403=25歳: 報恩院隆源より許可灌頂をうける。

・ ・ ・ ・ ・ 1405=27歳:

・ ・ ・ ・ ・ 1407=29歳: 義満より, 三河国々衙職を安堵される。

足利義満没・1408=30歳: 義満が死去すると, 義持から護持僧に任命され, 五壇法で金剛夜叉法を担当。発給・受給分文書も増大。
持氏鎌倉公方1409=31歳: *大僧正となり, 続いて東寺一長者・寺務となる(一度目)。法務・公家護持僧にもなり, 護持僧らを統括。
・ ・ ・ ・ ・ 1410=32歳: 後七日御修法で大阿闍梨を勤める。義持より義満愛用の金襴袈裟を与えられる。伊豆国密厳院別当職を報恩院隆源に譲与する。

・ ・ ・ ・ ・ 1411=33歳: 日記をつけ始める。以後, 没するまで24年間つけ続け, 内容が正確・克明で, 幕府政治の機密にわたる部分も多い, 室町時代史の貴重な根本史料「満濟推后日記」を遺すことになる。

・ ・ ・ ・ ・ 1412=34歳: 再び報恩院隆源より許可灌頂,

・ ・ ・ ・ ・ 1413=35歳: 養母聖護院(白川殿)が死去。三度報恩院隆源より許可灌頂を受け, その正統性を完全に三宝院に移す。

・ ・ ・ ・ ・ 1414=36歳: 宗像大宮司氏経を筑前国若宮庄代官職に補任する。亡父今小路基冬の三十三回忌。

上杉禅秀の乱1416=38歳: 東寺一長者・寺務となる(二度目)。東国争乱の幕開けとなった上杉禅秀の乱の第一報が駿河守護今川範政から届き, 関東の情報を義持に伝え, 宇都宮持綱に「御内書」を渡し遣わす。以後, 関東への関わり増大。

・ ・ ・ ・ ・ 1417=39歳: 後七日御修法で大阿闍梨を勤める。

応永の外冠・1419=41歳: 実母出雲路禅尼(静雲院)が死去。

義持出家・1423=45歳: 義持の出家について事前に知らされず, 出家後最初の訪問地として法身院に到る。関東問題を議するため管領(畠山満家)亭で開かれた際, 重臣会議に初めて関与。

・ ・ ・ ・ ・ 1424=46歳: 花山院僧正定助に副状を遣わす。

將軍不在化・1425=47歳: 足利義持, 満濟に鎌倉府・篠川御所への使書につき細川満元と協議させる。満濟, 足利義持に年中祈禱目録を進め, 義持, 明年もその諸寺に祈らせる。

・ ・ ・ ・ ・ 1427=49歳: 妹西輪寺長老が死去。

義教籤引將軍1428=50歳: *義持臨終の枕で“クジリ”の意思を確認する。万里小路時房より義円の還俗・名字・昇進のことにつき意見を聞く。還俗した義円の名を申し沙汰し義宣と改名。義賢とともに義宣に面謁。推后宣下を夢想し, 現実に, 推后となる。義宣から, 大内氏のことを申し次がせられ, 「非分御寄進の神領」につき諮問される。中壇に座し, 当代初度の五壇法始行。義宣の主導権発揮すべく彦仁擁立に向けて画策。

播磨国一揆・1429=51歳: 義宣元服の儀式で, 義満の先例により, 地藏院持円とともに護持僧を勤める。元服した義教が初めて醍醐寺三宝院に詣る。義教の執奏により, 四天王寺別当(檢校)になる。

尚氏王統確立1430=52歳: 小倉官(聖承)より「大方広仏花嚴經入法界品」を賜り, 副状を記す。弟子義賢に対し, 三宝院以下の讓状をしたためる。義教から護持管領とされる。

・ ・ ・ ・ ・ 1431=53歳: 義教から関東使との対面の可否を諮られる。東寺長者に還任(三度目)。後花園天皇の護持僧となる。筑前国安楽寺神輿造替のための大内盛見の書状届いた直後, 盛見戦死の報。弟子賢長が死去して衝撃を受け,

明貿易回復・1432=54歳: 義教から護持管領とされる。

・ ・ ・ ・ ・ 1433=55歳: 「大友・少弐御治罰」の祈禱, 「九州御祈」結願。後小松院死去による後花園天皇の諒闇問題に意見し, 義教発案の「新統古今和歌集」撰集のスタートにも大きな役割を果たし,

世阿弥配流・1434=56歳: 遣明船が入港した際, 尋常ならざる熱意発揮した義教に, 対応の仕方を指南, 発病し, 土佐行広を召し影像を写させる。債文をしたため, 弟子義賢に醍醐寺座主職を譲与。自ら肖像画の開眼供養, 讚を加え, 裏書を施す。管領細川持之から「唐朝へ御位署」のことを尋ねられる。返牒の年号表記につき幕府の尋ねに答えるなど, 最高政治顧問の役を続けたが,

・ ・ ・ ・ ・ 1435=57歳: 病気再発。置文の奥に書き加える。義賢安堵を給わり, 没した。